

連続失敗経験場面における調整型セルフ・コントロールの機能⁽¹⁾

杉 若 弘 子

(奈良教育大学心理学教室)

(平成12年4月28日受理)

キーワード： 連続失敗経験場面、セルフ・コントロール、改良型セルフ・コントロール、課題志向的な調整型セルフ・コントロール、非課題志向的な調整型セルフ・コントロール

セルフ・コントロール⁽²⁾は、2つのタイプに分けて考えることの重要性が何人かの研究者によって指摘されてきた(Kanfer & Scheffl, 1988; Nerenz & Leventhal, 1983; Rosenbaum, 1989)。それらに共通するのは、一方のセルフ・コントロールがストレスによって妨害された機能の回復を求めて、つまり現時点でのダメージ除去を目指して実行されるものであり、もう一方は、将来の結果を予測して満足遅延することで、より価値ある報酬を手に入れようとする(あるいは、後のダメージを回避する)セルフ・コントロールであるという点である。しかし、これらの提言はいずれも仮説止まりで、実証的な研究は行われてこなかった。

そこで、杉若(1995)は、前者に対応するredressive self-control (Rosenbaum, 1989)を調整型セルフ・コントロール、後者に対応するreformatory self-control (Rosenbaum, 1989)を改良型セルフ・コントロールと名付け、2つのセルフ・コントロールが日常生活の中でどの程度実行されているかを評価する尺度Redressive-Reformatory Self-Control Scale (RRS)を開発した。調整型セルフ・コントロールの実行を測定する下位尺度は自己教示や気そらし(distraction)に関連した計5項目、改良型セルフ・コントロールの実行を測定する下位尺度は問題解決方略や自己拘束に関連した計8項目で構成されている。

RRSの開発以降、これら2つのセルフ・コントロールに影響する要因を明らかにするため、内的要因と外的要因を統制した研究が行われてきた(例えば、Sugiwaka, 1998; 杉若, 1999; 杉若・上里, 1994; 杉若・大河内, 1999; 八木・杉若, 2000など)。

内的要因とは、比較的一貫した個人の特性、すなわち個人差要因のことである。RRSによって測定されるセルフ・コントロールの行動レパートリーの個人差は、内的要因として扱われる。これに対し、外的要因とは状況変数を指す。個人をとりまく状況の変化が2つのセルフ・

コントロールにどのような影響を与えるのかという視点である。行動の決定因を明らかにするためには、内的要因と外的要因の両方を考慮する必要がある(苔林, 1993)。

これまでの研究成果から、改良型セルフ・コントロールの実行度が最も高まるのは、外的要因としての状況変数の困難度が高く、行動の結果が明確な場合であることが明らかになっている。また、内的要因に関しては、RRSで測定される改良型セルフ・コントロールの行動レパートリーが少ない被験者は、行動コストの影響を受けやすいため、低コストのプログラムから順次取り組ませる必要があるとされている(Sugiwaka, 1998; 杉若・馬場, 1997; 杉若・馬場, 1998)。

一方、調整型セルフ・コントロールについては、杉若(1999)が、その実行に影響する外的要因として、行動に先行する状況を取り上げ、質問紙冒頭の刺激文で呈示した。その結果、(1)調整型セルフ・コントロールで用いられるcontrolling response(コントロールする反応: コントロールされる反応(controlled response)の生起確率を変える反応のこと(Skinner, 1953 河合監訳、印刷中))は、その内容から課題志向的なもの(positiveな結果のイメージや成功経験に関連した自己教示など。例: 「うまくスピーチを終えたときのことを想像する」、「うまくやれるはず」と自分に言い聞かせる)と非課題志向的なもの(単にストレス事態を乗り切るためだけの気そらしや自己教示など。例: 「失敗しても大したことではない」と言い聞かせる)、「ほんの数分ガマンすれば済むことだ」と考える)に分類できること、(2)外的要因の影響として、改良型セルフ・コントロールとは逆に、調整型セルフ・コントロールは状況の困難度が高くなるとその実行度が低下すること、(3)内的要因と外的要因の交互作用として、課題志向的な調整型セルフ・コントロールの実行度における行動レパートリーの差は、高難

度状況でより顕著になること、(4) 非課題志向的な調整型セルフ・コントロールは、実行度そのものが全般的に低いこと、が明らかになった。

上記 (1) の結果は、岩崎・伊藤・根建 (1999) の、調整型セルフ・コントロールのcontrolling responseとして用いられることの多い自己教示が「積極的対処型」と「消極的対処型」に分類されることと概念的に符合する。杉若 (1999) の分類に従えば、「積極的対処型」の自己教示は「課題志向的な調整型セルフ・コントロール」に、「消極的対処型」の自己教示は「非課題志向的な調整型セルフ・コントロール」に含まれる。このことから、調整型セルフ・コントロールの内容が2つに分類されるという結果は、信頼性が高いとみてよいだろう。

上記 (2) と (4) の結果は、もう少し外的要因と関係づけて考察する必要があるかもしれない。杉若 (1999) で扱った外的要因には、目標達成の困難度と失敗時に被るダメージの大きさという2つの要素が含まれており、呈示した先行状況ではこれらを同時に操作していた。後に、2つの要素を分けて操作した八木・杉若 (2000) の結果と比較したところ、2つの要素のうち、目標達成の困難度が高まると課題志向的な調整型セルフ・コントロールは減少するが、非課題志向的な調整型セルフ・コントロールはむしろ増加することが明らかになっている (杉若、投稿中)。また、例えば、強大なストレスにさらされた直後や困難度がさらに高まっていくような状況では、現在のダメージ除去のみを目的とする非課題志向的なセルフ・コントロールの増加が予想される。

そこで本研究では、学習性無力感の実験で用いられる連続失敗経験場面における調整型セルフ・コントロールの機能を検討する。調整型セルフ・コントロールは、現在進行中の行動を妨害する情動的・認知的なストレス反応を制御するものである。したがって、失敗経験を繰り返すような状況では、有効に機能するcontrolling responseの内容が変化していく可能性が大きい。

具体的には、以下の仮説を検証する。

仮説1：連続失敗経験場面では、非課題志向的な調整型セルフ・コントロールの実行度が上昇する。

仮説2：調整型セルフ・コントロールの行動レパートリーが少ない被験者は、外的要因 (連続失敗経験) の影響を受けやすく、行動レパートリーの多い被験者よりも早く課題志向的な調整型セルフ・コントロールの実行度が低下する。

方 法

被験者 実験に先立ち、大学生362名 (男子114名、女子248名) を対象にRRS (杉若、1995) を実施した。調整型セルフ・コントロールの行動レパートリーの個人差

を内的要因とするため、RRSの下位尺度得点をもとに被験者のスクリーニングを行った。実験に参加したのは、調整型セルフ・コントロールの下位得点が上位25%に含まれることから行動レパートリーが多いと判断されたHRD群 (n=22)、下位25%に含まれることから行動レパートリーが少ないと判断されたLRD群 (n=23) の計45名であった。改良型セルフ・コントロールの得点は、その影響を排除するため、中位50%以内であることを抽出条件とした。両群の改良型セルフ・コントロールの得点に有意差はなかった ($t(43)=20, n.s.$)。

実験材料 (1) 課題 連続失敗経験場面を設定するために、6ピースの木片から成るパズル課題 (“the F”、匹見産業㈱) を用いた。影絵で示された形状を、6つの木片すべてを使って完成させる課題である。事前の調査で、10名中10名が2分以内に解けた2課題を容易課題、17名中16名が5分以上かかった6課題を困難課題に選定した。容易課題は被験者に成功を経験させる試行、困難課題は失敗を経験させる試行で呈示した。(2) 調整型セルフ・コントロールの実行度を測定する尺度 杉若 (1999) で得た因子に含まれる項目を、本研究の実験事態に沿った表現に修正し、「全くあてはまらない (1)」から「まさにあてはまる (6)」の6件法で評定させた。課題志向的な調整型セルフ・コントロール7項目 (例：「落ち着け、落ち着けばできるぞ」と自分に言い聞かせた」、「良い成績がついたときのことを想像し、やる気を起こした」)、非課題志向的な調整型セルフ・コントロール5項目 (例：「あとちょっとガマンすれば済むことだ」と考えた」、「できないのは私だけでない」と思うようにした) の計12項目で構成した。(3) 連続失敗経験場面における心理的变化を測定する尺度 羅 (1991) が用いた質問項目のうち、意欲・関心の因子 (3項目)、無力感の因子 (3項目)、結果に対する満足感の因子 (3項目) に含まれる計9項目を、「全くあてはまらない (1)」から「まさにあてはまる (6)」の6件法で評定させた。調整型セルフ・コントロールの実行度を測定する尺度と心理的变化を測定する尺度は、A4用紙1枚の質問紙として呈示した。

手続き 実験の流れを図1に示す。被験者と実験者は、机を挟んで向かい合わせに着席した。課題内容に関する教示 (後述) に続いて、練習試行を実施し、不明な点があれば質問に回答の後、本試行を実施した。容易課題を1試行実施した後、困難課題を連続3試行実施した後、困難課題をさらに連続3試行実施した後には、それぞれ質問紙の実施と1分間の休憩時間を設けた。最後に、容易課題を1試行実施して、実験は終了した。

教示 練習試行の前には、パズル課題の解き方を示し、今回の実験参加者の中で5位以内の成績を取めると景品が獲得できることを伝えた。本試行前の教示では、「そ

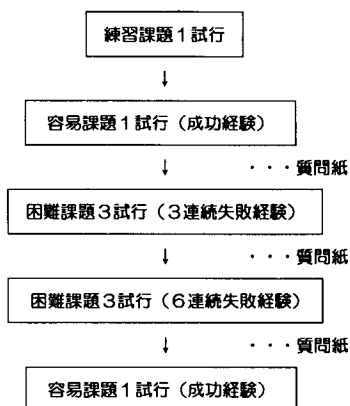


図1 実験の流れ

れでは、課題を始めます。6ピースの木片をすべて使って、できるだけ早くパズルを完成させてください。制限時間は5分です。2分前と1分前にはこちらから合図を出します。パズルが完成したら、「できた」と言ってください。」と述べ、影絵の呈示とともにパズル課題を開始した。

結 果

パズル課題は、制限時間5分以内に解決できた場合を成功、できなかった場合を失敗とした。最初の容易課題で失敗した者と困難課題で成功した者計5名は、分析から除外した。その結果、有効被験者数は、HRD群20名(男性4名、女性16名)、LRD群20名(男性6名、女性14名)の計40名となった。

1. データの整理と分析

データの分析には、それぞれ次のような統計的手法を用いた。尺度の内的整合性は、 α 係数をその指標とした。容易課題解決に要した時間を従属変数とする分析では、2(群)×2(失敗経験の前後)の分散分析を行った。心理的变化ならびに課題志向的な調整型セルフ・コントロール、非課題志向的な調整型セルフ・コントロールの実行度を対象にした分析では、各尺度の因子に含まれる項目の合計得点を従属変数として、2(群)×3(失敗経験の回数：成功経験(失敗経験なし)後、3回連続失敗経験後、6回連続失敗経験後)の分散分析を実施した。下位検定にはHSD法による多重比較を用いた。

2. 容易課題解決に要した時間

連続失敗経験が課題パフォーマンスに与える影響を調べるため、失敗経験前後の容易課題解決に要した時間を従属変数とする分散分析を行った。失敗経験後の容易課題を制限時間内に解決できなかった被験者(HRD群4名、LRD群3名)は、制限時間いっぱいの5分を要したものとして処理した。分析の結果、失敗経験の主効果が有意であり、失敗経験前の容易課題(M=28.1sec)よりも経

験後の容易課題(M=111.3sec)に要した時間が長くなっていた($F(1,38)=27.19, p<.0001$)。

3. 心理的变化

(1) 尺度の内的整合性

3回の測定時期における α 係数は、意欲・関心の因子で.77、.86、.88、無力感の因子で.42、.49、.47、結果に対する満足感の因子で.51、.63、.69という値が得られた。無力感の因子は、いずれの測定時期においても α 係数が低いため、この因子に関する結果は分析から除外した。

(2) 意欲・関心の因子(得点可能範囲;3~18)

意欲・関心の変化を図2に示す。分散分析の結果、失敗経験の回数の主効果が有意であった($F(1,76)=19.81, p<.0001$)。下位検定により、3回連続失敗経験後(M=10.3)と6回連続失敗経験後(M=10.0)の意欲・関心は、成功経験後(M=11.9)よりも有意に低下していることが明らかになった(Mse=2.01, $p<.05$)。

(3) 結果に対する満足感の因子(得点可能範囲;3~18)

結果に対する満足感の変化を図3に示す。失敗経験の回数の主効果が有意であったため($F(2,76)=154.09, p<.0001$)、下位検定を行ったところ、成功経験後(M=10.3)よりも3回連続失敗経験後(M=6.3)で、また、さらに6回連続失敗経験後(M=5.5)で満足感が有意に低下していた(Mse=1.71, $p<.05$)。

連続失敗経験によって、容易課題解決に要する時間が長くなり、意欲・関心と結果に対する満足感が低下したという結果は、本研究で用いた学習性無力感の実験事態の妥当性を支持するものといえよう。

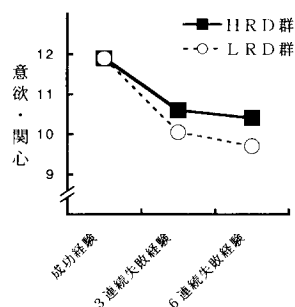


図2 「意欲・関心」の変化

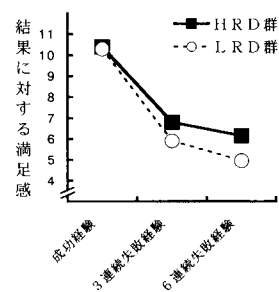


図3 「結果に対する満足感」の変化

4. 調整型セルフ・コントロールの実行度

(1) 尺度の内的整合性

3回の測定時期における α 係数は、課題志向的な調整型セルフ・コントロールの実行度を測定する尺度で.62、.77、.76、非課題志向的な調整型セルフ・コントロールを測定する尺度で.57、.66、.59という値を得た。被験者数(n=40)を考慮すると、2つの尺度は信頼性をほぼ満足させる水準にあると考えてよいだろう。

(2) 課題志向的な調整型セルフ・コントロールの実行度(得点可能範囲; 7~42)

連続失敗経験場面における課題志向的な調整型セルフ・コントロールの変化を図4に示す。分散分析の結果、失敗経験の回数の主効果に有意な傾向があった($F(2,76)=2.82, .05 < p < .10$)。下位検定を行ったところ、6回連続失敗経験場面における実行度(M=19.9)は、3回連続失敗経験場面(M=21.6)よりも低い傾向にあった($Mse=12.88, .05 < p < .10$)。課題志向的な調整型セルフ・コントロールの実行度は、連続失敗経験という困難度がさらに高まっていく状況では、減少していく傾向のあることが分かる。

(3) 非課題志向的な調整型セルフ・コントロールの実行度(得点可能範囲; 5~30)

非課題志向的な調整型セルフ・コントロールの変化を図5に示す。失敗経験の回数の主効果が有意であり($F(2,76)=6.45, p < .05$)、下位検定の結果、3回連続失敗経験場面(M=15.4)と6回連続失敗経験場面(M=15.9)

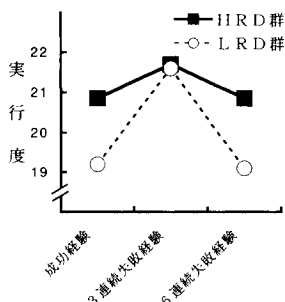


図4 連続失敗経験による課題志向的な調整型セルフ・コントロールの変化

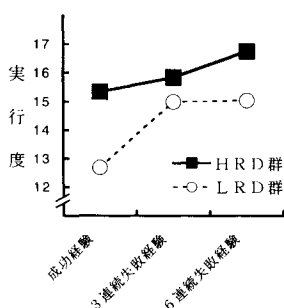


図5 連続失敗経験による非課題志向的な調整型セルフ・コントロールの変化

表1 調整型セルフ・コントロールの実行度と心理的变化(意欲・関心)の相関係数(r)

| | 意欲・関心 | | |
|----------------------|-------|------|------|
| | a | b | c |
| 全被験者(n=40) | | | |
| 課題志向的な調整型セルフ・コントロール | .14 | .16 | .44 |
| 非課題志向的な調整型セルフ・コントロール | -.04 | -.23 | -.22 |
| HRD群(n=20) | | | |
| 課題志向的な調整型セルフ・コントロール | -.01 | .02 | .31 |
| 非課題志向的な調整型セルフ・コントロール | -.06 | -.40 | -.45 |
| LRD群(n=20) | | | |
| 課題志向的な調整型セルフ・コントロール | .26 | .32 | .53 |
| 非課題志向的な調整型セルフ・コントロール | -.03 | -.08 | -.09 |

注) 表中の“a”は成功経験後、“b”は連続3回失敗経験後、“c”は連続6回失敗経験後の値であることを示す。

における実行度は、成功経験場面(M=9.9)よりも有意に高かった(Mse=5.89, $p < .05$)。非課題志向的な調整型セルフ・コントロールの実行度は、失敗を経験することで増大し、さらに失敗を重ねても維持されることが分かる。

5. 調整型セルフ・コントロールと心理的变化の関係

連続失敗経験場面における2つの調整型セルフ・コントロールと心理的变化の関係を調べるため、相関係数を算出した。その結果、心理的变化の指標のうち、内的整合性(α 係数)の高い意欲・関心の因子と2つの調整型セルフ・コントロールの間に次のような相関があった(表1)。

まず、連続6回失敗経験後の意欲・関心と課題志向的な調整型セルフ・コントロールの実行度には中程度の正の相関があった($r=.44$)。また、このような傾向はLRD群でより顕著であった(HRD群 $r=.31$; LRD群 $r=.53$)。一方、非課題志向的な調整型セルフ・コントロールとの間には、HRD群でのみ、中程度の負の相関があった(連続3回失敗経験後 $r=-.40$; 連続6回失敗経験後 $r=-.45$)。

この結果を、先に示した心理的变化ならびに2つの調整型セルフ・コントロールの実行度の変化に関する結果と合わせてみると、連続失敗経験による意欲・関心の低下は、(1)課題志向的な調整型セルフ・コントロールの減少と関連しており、この傾向は行動レパトリーの少ないLRD群でより顕著であること、(2)行動レパトリーの多いHRD群では、非課題志向的な調整型セルフ・コントロールの増加と関連のあること、が明らかになった。

考 察

本研究では、行動に随伴する結果を外的要因として操作し、連続失敗経験場面における課題志向的、非課題志

向的な調整型セルフ・コントロールの機能を検討した。

その結果、課題志向的な調整型セルフ・コントロールは失敗経験を重ねると減少する傾向にあるが、非課題志向的な調整型セルフ・コントロールは失敗経験によって増加し、さらに失敗を重ねても維持されることが明らかになった。つまり、外的要因に関する仮説1は支持されたといつてよいだろう。

失敗経験を重ねると課題志向的な調整型セルフ・コントロールが減少するという結果は、外的要因として行動に先行する状況を操作した杉若(1999)や八木・杉若(2000)で示された、目標達成の困難度が高まると課題志向的な調整型セルフ・コントロールの実行度が低下するという結果と一致している。

また、失敗経験を重ねると非課題志向的な調整型セルフ・コントロールの実行度が高まるという結果は、杉若(1999)と八木・杉若(2000)の研究結果を比較することで明らかになった(杉若、投稿中)、目標達成の困難度が高まると非課題志向的な調整型セルフ・コントロールが増加するという結果と一致する。

本研究で扱った連続失敗経験は、杉若(1999)と八木・杉若(2000)で操作した外的要因の内、目標達成の困難度に対応している。もう一方の要素であった失敗時に被るダメージは、これが大きくなるといずれの調整型セルフ・コントロールも実行度が低下すること、さらに、課題志向的な調整型セルフ・コントロールは、目標達成の困難度の影響をより強く受け($p < .05$)、非課題志向的な調整型セルフ・コントロールは、失敗時に被るダメージの大きさの影響をより強く受ける傾向($.05 < p < .10$)にあることが明らかになっている(八木・杉若, 2000)。杉若(1999)において、課題志向性に関わらず、調整型セルフ・コントロールは状況の困難度が高まると実行度が低下するという結果になったのは、非課題志向的な調整型セルフ・コントロールが2つの外的要因のうち失敗時に被るダメージの大きさの影響をより強く受ける傾向のためだと考えるのが妥当であろう。

一方、内的要因に関しては、心理的变化ならびに調整型セルフ・コントロールの実行度を従属変数とする分散分析においては、その影響が見出されなかった。この結果は、外的要因として行動に先行する状況を操作した先行研究(杉若, 1999; 杉若・上里, 1994; 八木・杉若, 2000)に比べて、行動に随伴する結果を操作した本研究の外的要因が、内的要因としての個人差よりも影響力のある「強い状況」(Mischel, 1977)であったためと考えられる。

しかし、調整型セルフ・コントロールの実行度と心理的变化の相関分析では、その一部で内的要因の影響が確認されている。すなわち、連続失敗経験によって「意欲・関心」が低下すると、行動レハートリーの少ない

LRD群では課題志向的な調整型セルフ・コントロールの実行度が低下し、困難度が高まる状況での役割が期待できる非課題志向的な調整型セルフ・コントロールの実行度もさほど上昇しなかった。これに対し、行動レハートリーの多いHRD群では、課題志向的な調整型セルフ・コントロールの減少もLRD群よりは少なく、さらに、失敗経験を重ねると非課題志向的な調整型セルフ・コントロールの実行度が上昇した。この結果から示唆されるのは、HRD群の被験者はLRD群に比べ、状況の困難度により柔軟に対処できているということである。

LRD群はHRD群よりも外的要因の影響を受けやすいため、課題志向的な調整型セルフ・コントロールの減少が早いとした仮説2を支持するデータは、分散分析からは得られなかった。しかし、相関分析の結果ならびに図4の課題志向的な調整型セルフ・コントロールの変化傾向を見る限り、仮説2を完全に棄却することはできないだろう。この点については、さらなるデータが望まれる。

本研究によって、現在進行中の行動を妨害する情動的・認知的なストレス反応を制御する調整型セルフ・コントロールのうち、非課題志向的な調整型セルフ・コントロールは、連続失敗経験場面という困難度がさらに高まる状況で活性化することが明らかになった。確かに非課題志向的な調整型セルフ・コントロールの機能は、外的要因が「強い状況」(Mischel, 1977)であり、さらにその困難度が高まっていくような状況にあってこそ発揮されるものだといえよう。

今回の結果を日常場面へと発展させれば、強いストレスにさらされたり、落ち込みの激しいときには、非課題志向的であってもよいからとにかくその場の気分を和らげることのできる調整型セルフ・コントロールを実行し、回復を得た後に課題志向的なコントロールを活用するというのが適応的な反応ではないだろうか。課題志向的な調整型セルフ・コントロールと非課題志向的な調整型セルフ・コントロールとは異なる機能を有するため、個人と状況に応じたコントロールを実行することで、より効果的なストレス反応の低減がなされるであろう。

注

- (1) 本研究は、福井華奈子が筆者の指導のもとに1999年度に奈良教育大学教育学部に提出した卒業論文(“連続失敗経験場面における調整型セルフ・コントロールの役割”)のデータをもとに分析を加え、新たな観点から再構成したものである。
- (2) ここでいうセルフ・コントロールとは、行動論的セルフ・コントロールである。Thoresen & Mahoney (1974)は、行動論的セルフ・コントロールを、“直接的な外的強制力がない場面で、自発的に自己の行動を統制すること”と定義している。また、より操作的には、Skinner (1953)が、“人が別の反応(コントロールされる反応 controlled response)の生起確率を変えるある反応(コントロールする反応 controlling response)をする過程”と定義づけている。

文 献

- 岩崎志保・伊藤義徳・根建金男 1999 テスト不安に対する自己教示文の作成とその効果に関する研究 日本行動療法学会第25回大会発表論文集, 150-151.
- Kanfer,F.H.& Schefft,B.K. 1988 *Guiding the process of therapeutic change*. Illinois : Research Press.
- 羅 世玲 1991 成功・失敗経験が課題解決事態に及ぼす影響—肢体不自由者と健常者を対象に— 教育心理学研究, **39**, 28-35.
- Mischel,W. 1977 The interaction of person and situation. In D. Magnusson & N.S.Endler (Eds.), *Personality at the crossroads:Current issues in interactional psychology*. Hillsdale, n. J. : Lawrence Erlbaum Associates. Pp.333-352.
- Nerenz,S.M.,& Leventhal,H. 1983 Self-regulation theory in chronic illness. In T.G. Burish & L.A. Bradley (Eds.), *Coping with chronic disease: Research and applications*. New York: Academic Press. Pp.13-37.
- Rosenbaum,M. 1989 Self-control under stress : The role of learned resourcefulness. *Advances in Behaviour Research and Therapy*, **11**, 249-258.
- スキナー, B.F. 河合伊六 (監訳) (印刷中) 科学と人間行動 二瓶社, (Skinner,B.F. 1953 *Science and human behavior*. New York: The Free Press.)
- 杉若弘子 1995 日常的なセルフ・コントロールの個人差評価に関する研究 心理学研究, **66**, 169-175.
- Sugiwaka,H. 1998 The repressive and the active approaches on self-control. *World Congress of Behavioral & Cognitive Therapies '98 Proceedings*, 260.
- 杉若弘子 1999 調整型セルフ・コントロールの実行を決定する要因—行動レハトリーと状況要因の検討— 日本行動療法学会第25回大会発表論文集, 114-115.
- 杉若弘子 (投稿中) 調整型セルフ・コントロールの実行を決定する要因—内的要因と外的要因の検討—
- 杉若弘子・上里一郎 1994 調整型、改良型のセルフ・コントロールに影響する状況要因の検討—ストレス状況下におけるセルフ・コントロール (3) — 日本行動療法学会第20回大会発表論文集, 54-55.
- 杉若弘子・馬場香絵 1997 改良型セルフ・コントロールに及ぼす行動期間と目標達成確率の影響 日本行動療法学会第23回大会発表論文集, 93-94.
- 杉若弘子・馬場香絵 1998 セルフ・コントロールにおける抑制的アプローチと積極的アプローチ—目標達成度と行動コストの影響— 日本行動療法学会第24回大会発表論文集, 134-135.
- 杉若弘子・大河内浩人 1999 遅延と努力のdiscounting function 日本行動分析学会第17回年次大会発表論文集, 126-127.
- ソレセン, C.E.・マホーニィ, M.J. 上里一郎 (監訳) 1978 セルフコントロール 福村出版 (Thoresen,C.E., & Mahoney, M.J. 1974 *Behavioral self-control*. New York :Rinchart & Winston.)
- 若林明雄 1993 パーソナリティー研究における“人間—状況論争”の動向 心理学研究, **64**, 298-312.
- 八木聡子・杉若弘子 2000 調整型セルフ・コントロールに影響を及ぼす外的要因—「目標達成の困難度」と「失敗ダメージの大きさ」について— 日本教育心理学会第42回総会発表論文集, 509

The Function of Redressive Self-Control in a Series of Failure Experiences

Hiroko SUGIWAKA

(Department of Psychology, Nara University of Education, Nara 630-8528, Japan)

(Received April 28, 2000)

The present study examined the functions of redressive self-control (RDSC) in a series of failure experiences. Subjects with many (HRD-group, n=22) or few (LRD-group, n=23) behavioral repertoires of self-control participated in a learned helplessness experiment. The tasks were puzzles, some of which were easily solvable for the success experiences, whereas others were difficult or unsolvable for the failure experiences. The experiment consisted of one success session, two sets of failure sessions, and one success session. The change of psychological states and the execution of the task-oriented- or non-task-oriented-RDSC in each session were analyzed. Major findings were as follows : (a) the task-oriented-RDSC increased temporarily, but decreased at once in a series of failure. (b) the non-task-oriented- RDSC was adopted more significantly in failure experiences. (c) during the failure experiences, the HRD subjects executed two types of RDSC more flexibly than LRD subjects did. These results were discussed in terms of the interaction of person and situation, and of the effective self-control in being exposed to a failure.

Key Words: series of failure experiences, self-control, reformative self-control, task-oriented- or non-task- oriented-redressive self-control